第３類

小学校家庭科衣分野における基礎縫い指導に関する一考察

白坂　文
SHIRASAKA　Aya

家庭科は生活者として自立する能力や家庭を築き経営していく能力を育て、さらに変化する社会に主体的に対応し、新しい生活文化の創造に取り組む意欲と態度を育てる役割を担っている。本稿では「家庭科教育法」の履修学生に、高校までに学習した家庭科の衣生活分野においての経験と、本授業で学んだ内容や基礎縫いに関する技術の理解度、製作した作品に関する満足度をアンケートにより調査し、本授業の実技内容と今後の方向性を検討した。

その結果、将来小学校教諭になり家庭科を指導することになった場合の知識・技能を身に付けることができ自信になったと多くの履修学生が感じていることが明らかとなった。しかし、理解度に関しては個人差があり、自身での製作はできるが、これを児童に指導していくとなると自信がないと答えている履修学生もある。このことから、より実技的授業を多く持ち、基礎的な縫製技術を実践的に学び、十分に習得する仕組みが必要であると思われる。

キーワード：家庭科、家庭科教育法、衣生活分野、基礎縫い、実技的授業

1.　はじめに

平成20年3月に告示された文部科学省（以下、文科省）の学習指導要領では、小学校家庭科の目標を「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にする心情をはぐくみ、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」とし、学習内容は、A「家庭生活と家族」、B「日常の食事と調理の基礎」、C「快適な衣服と住まい」、D「身近な消費生活と環境」の4つの内容で構成されている[i]。

本研究では、本学児童教育学科の教育課程である「家庭科教育法」で指導している学習内容の“衣分野”を取り上げ、C「快適な衣服と住まい」の学習内容、その中でも『生活に役立つ物の製作』に研究の視点を置くこととする。

川端（2008）は、「児童の手指の巧緻性低下の実態は、家庭科の実習においてかなり以前から指摘されており、中でも被服製作学習においては、針に糸が通せない、玉結び・玉どめができないことから始まり、以前に比べ授業進行が停滞しがちな状況で、日常の生活の中で『縫う』ことの必要性の減少と相まって、学習内容が徐々に簡易化されながら今日に至っている」と述べている[ii]が、著者が現在まで担当してきた様々な被服系授業の中でも玉結び・玉どめができない、針に糸が通せないといった手指の巧緻性の低下を感じる機会が多くあった。

また永田ら（2014）は「小学校教員は家庭科に関する専門的な教育を受けておらず、家庭科授業経験のない教員も多い。そのため家庭科教育研究の指定にあたると不安を感じるが、授業未経験者と授業経験者には、不安内容に違いがある」と指

摘しており[iii]、板倉（2012）もまた「『家庭科』の指導に関して自信がなく、不安を抱えているという教師が多い。新学年の当初に『家庭科』を担当する段になり、物心両面での準備が不十分なまま、取りあえず授業がスタートしてしまったという事例を近年よく耳にするようになった」と述べている[iv]。

以上の指摘のように、日常生活では布を使った物づくりの必然性が低下し、家庭の中で布と針を持つ機会が減少していることから、児童・生徒の手指の巧緻性が低下の一途にある。また教員側においても自身が家庭科の専門的教育を受けていないということに不安感を持っており、家庭科の、特に“衣分野”における縫製技術の習得と、そこを指導する技術・指導力の習得が十分でないことが分かる。

小学校家庭科では手縫い（玉結び・玉どめ、なみ縫い、本返し縫い、半返し縫い、かがり縫い、ボタン付け）とミシン縫い（直線縫い）を用い、生活に役立つ物の製作を習得することを目指しているが、小学校家庭科の使用教科書は、現在、開隆堂出版株式会社（以下、開隆堂）と東京書籍株式会社(以下、東京書籍)の2社のみからの出版で、5･6年の2年間で学ぶ、布を用いた作品の製作方法として開隆堂では、「ネームプレート、フェルトでつくるカード入れ、ペットボトルキャップの針さし、布でつくるティッシュペーパー入れ、ランチョンマット、クッション、マルチカバー、まくらカバー、花ふきん、ブックカバー、マイバッグ、ナップザック、エプロン、カフェエプロン」を掲載。参考作品として「数字のマスコット、はさみケース、ペンケース、つながるアイスクリームマスコット、ハンカチでつくるふくろ、針さし、フリルきんちゃく、小物の整理に役立つバッグ、湯たんぽカバー、フォーク・スプーン入れ」を掲載している[v]。

また東京書籍では、「ワッペン、小物入れ、名札、きんちゃくぶくろ、なべしき、ウォールポケット、ランチョンマット、エプロン、トートバッグ、クッションカバー」を掲載し、参考作品としては「クッションカバー、きんちゃく、サッカーボールを入れるふくろ、トートバッグ、弁当箱を入れるふくろ、リフォームきんちゃく、リフォーム帽子、リフォームポーチ、リフォームマフラー、リフォームクッションカバー、リフォームアームカバー、リフォーム髪飾り、リフォームカフェエプロン、マスク、カイロ入れ」を掲載している[vi]。

著者が担当している「家庭科教育法」では、授業計画の第2回から第5回の“手縫いとミシン縫い”の中で、布を用いた生活に役立つ物の製作としてエプロン製作を行っている。ポケットに手縫いでフェルトをパッチワークしたり刺繍したりすることにより、小学校家庭科で学ぶ手縫いの技術を習得し、エプロン本体とポケット付けにおいてミシンの操作や直進縫いの技術を習得するようにしている[vii]。

また、1回生の教科に関する科目「家庭」の中では、玉結び・玉どめ、なみ縫い、本返し縫い、半返し縫い、かがり縫い、ボタン付けといった手縫いの“基礎縫い”と、ミシンの上糸の掛け方と下糸の巻き方、ボビンのセットの仕方といった、ミシンの操作方法と直線縫いに関して指導しており、「家庭」から「家庭科教育法」への学びがスムーズに展開できるように留意している。

本来であれば、1回生時に「家庭」を履修し、2回生時で「家庭科教育法」（以下、本授業）を履修するべきであるが、今年度の本授業履修学生の多くは家庭を未履修であったため、手縫いの“基礎縫い”を授業の第2回目に実施し、エプロン制作は第3回目から第6回の実施とした。この基礎縫いに関する縫製技術の理解度と、製作した作品に関する達成感と満足度をアンケートにより調査・分析し、本授業の実習内容の検討と今後の方向性を詳述していきたい。

2. 方　法

2.1　調査対象及び調査時期

家庭科教育法履修学生22名に対して、初回授業日である平成29年4月11日と、最終授業日である

平成29年8月1日に実施した。

2.2 調査内容

初回授業日の調査内容は、

（1）小･中･高の家庭科で製作した物について

（2）手縫い、ミシン縫いの能否について

のアンケート調査2種類である。

最終授業日の調査内容は、

（2）手縫い、ミシン縫いの能否について

（3）作品の達成感、満足度について

（4）感想レポート

のアンケート調査2種と記述式レポートである。

2.3 調査方法

調査は質問紙法を行い、質問項目は（1）、（2）（3）に関しては選択式と、（4）に関しては自由記述式を併用した。

3. 授業実践の内容

3.1 小学校家庭科教科書について

先行研究として、平成 28 年度兵庫県下の公立小学校家庭科教科書の採択状況を調査した[viii]（表1）。先述したとおり、小学校家庭科の教科書としては現在、開隆堂と東京書籍の 2 社のみからの出版で、平成 29 年度用では開隆堂は“わたしたちの家庭科⑤⑥”、東京書籍は“新編 新しい家庭⑤⑥”である。表 1 をみると開隆堂を採択しているのは 10 地区、東京書籍を採択しているのは 9 地区でほぼ同数である。

布を用いての製作物や縫製技術についての掲載範囲は開隆堂では全体頁の 21.2%、東京書籍では全体頁の 26.8%で、製作物数に関しては両教科書ともほぼ同数であったのに対し、若干ではあるが東京書籍の方が布を用いた製作物や縫製方法等について頁数を多く使い掲載していることといえる。

東京書籍の掲載内容は、フリースのジャンバーや長袖シャツ、半袖シャツから様々なアイテムをリフォームするといったリサイクルの内容を掲載し環境問題を取り上げている内容や、学習内容に関係する仕事をしている方々に対し『プロに聞く！』として、洋服のデザイナー皆川明さんが洋服を作る時に大事にしているところをインタビューし掲載している内容等が開隆堂には無い部分である。

このように両教科書では掲載されている学習内容に多少違いがあり、学生が小学校教員になり家庭科を担当する場合には、どちらの教科書にも対応できるように多種多様の縫製技術や被服に関する知識を身に付けておくことが必要であると思われる。

表 1 平成 28 年度兵庫県下小学校教科書（家庭）採択状況

地区名	家庭⑤⑥	地区名	家庭⑤⑥
神戸（神戸市）	開隆堂出版	北播（西脇市・三木市・小野市・加西市・加東市・多可郡）	開隆堂出版
尼崎（尼崎市）	東京書籍		
西宮（西宮市）	開隆堂出版		
芦屋（芦屋市）	東京書籍	西播（相生市・たつの市・赤穂市・宍粟市・揖保郡・佐用郡）	東京書籍
伊丹（伊丹市）	東京書籍		
宝塚（宝塚市）	東京書籍		
川西（川西市・河辺郡）	東京書籍	但馬（豊岡市・養父市・朝来市・美方郡）	開隆堂出版
三田（三田市）	東京書籍		
丹波（篠山市・丹波市）	東京書籍	姫路（姫路市）	開隆堂出版
淡路（洲本市・淡路市・南あわじ市）	東京書籍	神崎（神崎郡）	開隆堂出版
		【明石市】神戸大学付属小学校	開隆堂出版
明石（明石市）	開隆堂出版		
加印（加古川市・高砂市・加古郡）	開隆堂出版	【加東市】国立兵庫教育大学付属小学校	開隆堂出版

3.2 初回授業時調査

学生の縫製技術の習熟度を測るため、初回授業時（以下、初回時）に小･中･高の家庭科で製作してきた物について、記憶にある範囲を全て記述させ（複数回答あり）、件数別でまとめた（表 2）。最も回答が多い物はエプロンで 6 件、手提げカバン、ナップザック、ハーフパンツが同数で 5 件と続き、次に巾着袋が 4 件、スカート、マスコットが 3 件、パジャマ、弁当袋、クッションカバーが 2 件、ティッシュケースから以下は全て 1 件という回答であった。頻度高く製作されている作品（上位 5 位まで）は袋物やエプロンが多く、また少数であるがスカート、パジャマ、浴衣といった縫製難度の高い作品の製作経験のある学生もあった。

この結果、本授業の履修学生は小･中･高の家庭

科において比較的縫製の経験があり、縫製技術の習熟度が高い学生もいることが明らかとなった。

表 2 小・中・高で製作したもの

作品名	回答数	作品名	回答数
エプロン	6	ティッシュ―ケース	1
手提げカバン	5	浴衣	1
ナップザック	5	ランチョンマット	1
ハーフパンツ	5	マフラー	1
巾着袋	4	あみぐるみ	1
スカート	3	ぞうきん	1
パジャマ	1	マスコット	1
弁当袋	1	ぬいぐるみ	1
クッションカバー	1	小物入れ	1

＊複数回答あり

続いて、小・中・高の家庭科で身に付けた手縫いの能否について「できる」、「少しできる」、「できない」の 3 段階評価で尋ねた（図 1）。

「なみ縫い」は 100%の学生が「できる」と答えており、「ボタン付け」も 90%の学生が「できる」と回答している。「かがり縫い」に関しては、「できる」と答えているのが 45%の学生で一番低い。続いて、「できる」との回答が低いものでいうと、「本返し縫い」が 59%、「半返し縫い」が 54%でほぼ半数の回答となった。

また「玉結び」ができると回答した学生は 68%、「玉どめ」は 77%であったが、玉結びや玉どめは縫う技能を始める前の最も基本的な基礎技能といえるものである。

川端の指摘でも上述したが、日景（2002）によると、糸結びテストの結果を通して、ここ半世紀の間、児童・生徒の手指の巧緻性が低下の一途にあると述べており[ix]、ここでのアンケート結果にも手指の巧緻性の低下が表れていると思われる。

次にミシンの直線縫いの能否に関しては（図 2）、縫製に関する項目「直線縫い」に加え、縫製に入る前のミシンの操作方法として「上糸を掛ける」、「下糸を巻く」、「下糸を入れる」、「下糸を出す」という項目について「できる」、「途中までできる」、「できない」と 3 段階の評価で操作方法を尋ねた。

ミシンの「直線縫い」を「できる」と回答した学生が 90%あるのに対し、「上糸を掛ける」54%、「下糸を巻く」40%、「下糸を入れる」36%、「下糸を出す」22%といった、縫う前の準備段階の操作が「できる」と回答した学生が少ないことが分かった。

ミシンの準備段階の操作方法ができないにもかかわらず、ミシンで直線縫いができるということは、ミシンの準備を誰かにしてもらい、そこから自身で直進縫いをしていたということになる。これに関しては、授業の中での学生の様子で明らかとしていく。

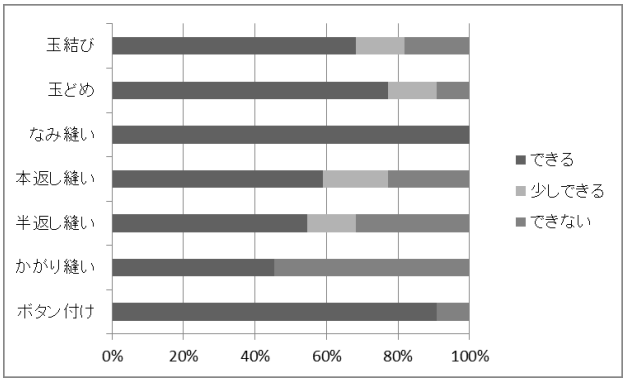


図 1 手縫いの能否

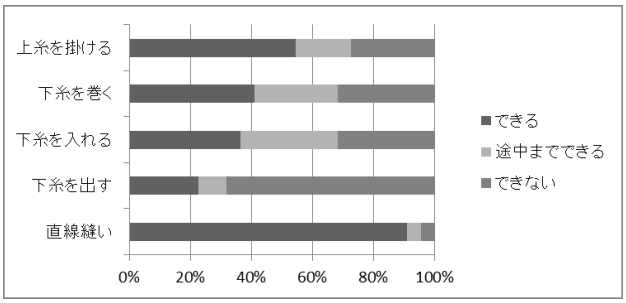


図 2 ミシンの操作と縫いの能否

3.2　基礎縫いについて

本来であれば 1 回生時に「家庭」を履修し、2 回生時で本授業を履修することを理想とした授業内容でシラバスを作成しているが、今年度の本授業履修学生の多くは 1 回生時に家庭を未履修であったため、手縫い及びミシン縫いの“基礎縫い”を授業の第 2 回目に実施した。

手縫いにおける基礎縫いでは、縦 23 ㎝×横 20 ㎝のシーチングを半分に折り二重にし、図 3 のように、なみ縫い、半返し縫い、本返し縫いと順番

を決め、著者が実演した後に学生各自に縫わせた。また縫い始めには玉結びの練習をさせ、縫い終わりには玉どめの練習も併せて行わさせることとした。

初回時のアンケートでは、半返し縫いと本返し縫いができるとの回答が半数程度であったが、実際に実演を見てから自身で縫うことで、より理解することができたとの意見が多く聞かれた。

ボタン付けに関しては、ボタンには四つ穴と二つ穴があるが、図 4-1 のように糸を掛けると糸が交差した部分が擦り切れやすいため、図 4-2 のように平行に糸を掛けることが一般的であることを学ばせた。また、ボタンを縫い付けた位置から 3 ㎝程度離した位置に切込みを入れ、切り目である布端を細かくかがり縫いすることにより、手縫いで行うボタンホールの縫製も学ばせることとしている。

ミシン縫いでは、手縫いと同様に縦 23 ㎝×横 20 ㎝のシーチングを半分に折り二重にしたシーチング（図 5）を準備し、ここではミシンの縫い目の大きさを 3 種類変えて縫うことを学生に練習させた。またミシンの操作に関しては、上糸は掛けられるが、下糸の巻き方があやふやな学生が多く、下糸をセットし、糸を出す方法が分からない学生も多く見られた。

またエプロン製作では角を縫う場面が出てくるため、角を印通りに曲がる縫製技術を練習させた（図 6-1、図 6-2）。角を縫う際は、針を角の印の上に刺し、押さえ金を上げて布の方向を変え、また押さえ金を下ろし縫うという手順で縫うが、この手順を理解できておらず、針を角の位置まで持ってこれず、押さえ金を上げている学生がみられた。また授業の中での会話で、ミシンが苦手な学生は今までで自身で準備操作をしておらず、先生や友人が操作をしてくれ、そこから自身で縫っていたということも明らかとなった。

しかし授業を進めていくうちに、ミシンの操作方法ではできる学生ができない学生を指導する姿もみられ、履修学生同士が協力しながら学ぶ様子もうかがえ、繰り返し学ぶことにより、操作ができない学生が徐々にできるよう変化していく様子がうかがえた。

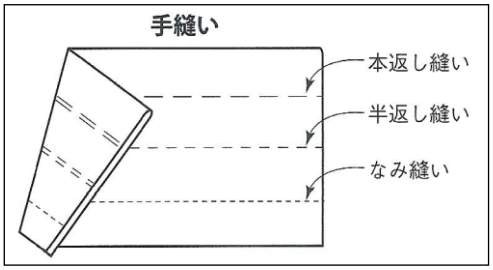


図 3 手縫いの基礎縫い布

図 4-1 ボタン付け（交差）

図 4-2 ボタン付け（並行）

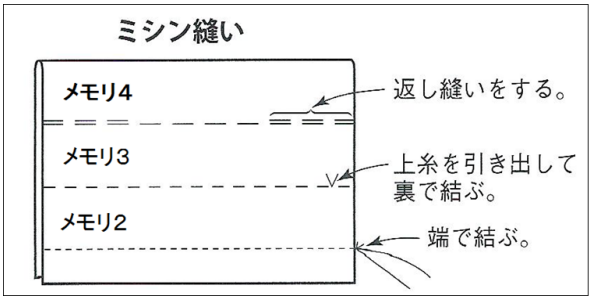


図 5 ミシン縫いの基礎縫い布

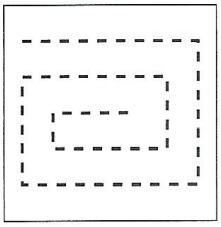


図 6-1 角縫い①

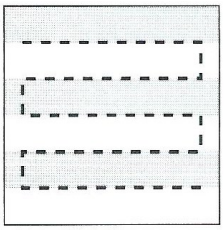


図 6-2 角縫い②

3.3 エプロン製作の実践例

手縫いとミシン縫いの“基礎縫い”で習得した縫製技術を応用発展させ、次にエプロン製作を行っているが、小学校家庭科では、開隆堂、東京書籍両方でエプロンは掲載されており、実際に家庭科の時間でエプロン製作を行っている。また、巾着などの袋物もエプロンと共に小学校では多く製

作されていることから、本授業で製作させているエプロンは、胸当て部分の斜めになる布端を三つ折りし、ひもを通すタイプとしている。これは限られた家庭科教育法の時間の中では、巾着袋の製作時間を取ることができないため、三つ折りしてひもを通すという縫製技術を同時に学ばせることとしている。

ポケットについては手縫いで学んだ「なみ縫い」、「半返し縫い」、「本返し縫い」、「ブランケットステッチ」等の手法を使い、フェルトをパッチワークしたり刺繍することとしているが、小学校家庭科で教える小物入れや名札制作には手に縫いの技術が多く使われている。このような手縫いの技術の習得は必須であるため、ポケット製作では手縫いの技術の向上を図ることを目標とし、出来るだけ多くの手縫いの手法を用いるようにしている。

またブランケットステッチに関しては基礎縫いに採用していないが、かがり縫いの一種ということとフェルトをアップリケする場合にはブランケットステッチには強度があり見栄えもよいことから、学生にブランケットステッチを指導したところ、ブランケットステッチを行いたいとの声が多くあり、採用した学生が多くあった。

エプロン縫製はミシンを使用し、布端は三つ折り縫いさせ、ポケットを縫い付ける部分と共に角の縫い方も併せて行わせた。

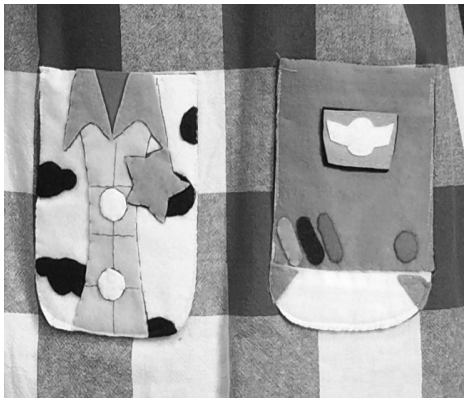
次に履修学生の中から４名の製作したエプロンのポケット部分もしくはエプロン本体にフェルトを手縫いで縫い付けた様子を実践例として紹介する。

＜例 1:男子学生 A さんの作品＞

◆解説◆ポケットにフェルトでパッチワークした A さんの作品はオリジナルで考えた“羊”のデザインとなっている。口元の曲線部分を「本返し縫い」で刺繍したが、口元の曲線部分は細かい針目で縫うことに留意し、カーブのスムーズな曲線を表現している。また羊を縫い付けるのは「ブランケットステッチ」を行い、耳や足は「かがり縫い」で縫い付けた。

◆感想◆針を持ったのは小学生以来で、正直エプロンを作り上げることができるか不安だった。実際縫っていると無心でのめりこんでいた。繰り返し縫うことによって、縫い方も理解できたし、縫い方もどんどん上手くなるのが分かった。返し縫は丈夫に縫えることも縫ってみて改めて感じたし、カーブの部分は出来るだけ針目を細かくすることできれいに縫えることも学ぶことができた。

＜例 2:女子学生 B さんの作品＞



◆解説◆B さんはポケットを左右二つにし、トイ・ストーリーのキャラクターをフェルトでパッチワークした。左のポケットにはキャラクターが着ている洋服の一部分を切り取ったデザインとし、衿や前打合せ部分を「本返し縫い」で輪郭線として表現し、ホルスタイン柄の黒の模様の部分は「なみ縫い」で縫い縫い付けた。

◆感想◆ポケットの下の部分を丸くカーブにすることにこだわり、先生に“ぐし縫い”という縫い方を教えてもらいました。難しかったけど、自分のこだわりの部分だったので出来てよかったです。エプロンをチェック柄にして、明るい感じのエプロンが出来ました。手縫いの本返し縫いの針目を

もう少し小さくすればよかったのが反省点ですが、気に入った作品が完成して満足です。

＜例 3:女子学生 C さんの作品＞

◆解説◆C さんはエプロン本体に女の子と鳥のデザインをパッチワークし、パッチワークの下に無地のポケットを縫い付けた。C さんの場合は縁取り部分全てを「ブランケットステッチ」で縫い、女の子と鳥の目を「玉どめ」で表現した。目の大きさは針に糸を掛ける回数を増やして糸玉の大きさを調整した。また女の子の胸元に飾りとして「ボタン付け」を行っている。

◆感想◆手縫いで気を付けたのは、針目を揃えること。ブランケットステッチは針目が揃うと綺麗に見えるので頑張った。女の子の目と、鳥の目は玉結び（刺繍ではフレンチノットということを学んだ）で表現したが、大きさをきっちり揃えるのに何度も何度もやり直したところが大変だった。女の子の服に実物のボタンを付けたところもポイントになっていると思う。

＜女子学生 D さんの作品＞

◆解説◆エプロン本体にフェルトでオリジナルの“クマの王様”をパッチワークした。D さんは「なみ縫い」、「本返し縫い」「ブランケットステッチ」、「かがり縫い」、「ボタン付け」と多くの手法を採用している。また風船型のマスコットを別個に製作し、中心部分のボタンホールにかがり縫いをし、プロン本体に付けたボタンに留め付けることができるようにし、子どもと遊ぶことも出来るよう工夫した。

◆感想◆私は自分が将来保育者になった時に、子どもと風船のマスコットを付け外しして遊べるエプロンを作りたいと考え作った。色々な縫い方に挑戦してみたが、限られた授業時間なので、風船は宿題で作ったりして大変だった。途中で大それたデザインにしすぎたかなと心配しになったが、最終的に気に入る作品が完成して嬉しかった。

3.4 最終授業時調査

最終授業時（以下、最終時）に初回時に実施した同項目で手縫いの能否、ミシンの操作と縫いの能否についてのアンケートを実施した。

その結果については、手縫いの初回時と最終時の比較を図 7 にまとめた。これをみると全ての項目で「できる」との回答が増加していることが分かる。手縫いの初回時アンケートで「できる」が 45%と一番低い回答であったかった「かがり縫い」に関しては、最終時のアンケートでは 86%と大きく回答が増加しており、続いて増加率が高い「本返し縫い」は 59%から 100%に、「半返し縫い」に関しては 54%から 77%に増加した。また、「玉結び」に関しても 68%から 86%に、「玉どめ」に関しても 77%から 90%に「できる」との回答が増えている。

ミシンの操作と縫いの能否に関しては図 8 に結果をまとめた。ミシンの操作と縫いに関しても全ての項目で「できる」との回答が増加しており、初回時のアンケートで「できる」が 22%と一番低い回答であった「下糸を出す」に関しては、最終時のアンケートでは 90%に、「下糸を入れる」に関しては 36%から 95%にと大幅に増加していることが分かる。

また「下糸を巻く」では初回時の 40%から 100%に、「上糸を掛ける」に関しても 54%から 100%に、「直線縫い」でも 90%から 100%と、全ての学生ができるようになったことが明らかとなった。

続いてエプロン製作を終えての達成感と満足度を「とてもある」、「ややある」、「どちらでもない」、「あまりない」、「全くない」の 5 段階評価で尋ねた（図 9）。満足感に関しては「とてもある」と回答した学生が 82%、「ややある」との回答が 13%、「どちらでもない」が 5%で、「とてもある」、「ややある」の回答を合わせると 95%の学生が満足度を得ていることが分かる。

また達成感に関しては「とてもある」が 91%、「ややある」が 9%、「どちらでもない」、「あまりない」、「全くない」との回答は 0%で、100%の学生が達成感があると感じている様子が明らかとなった。

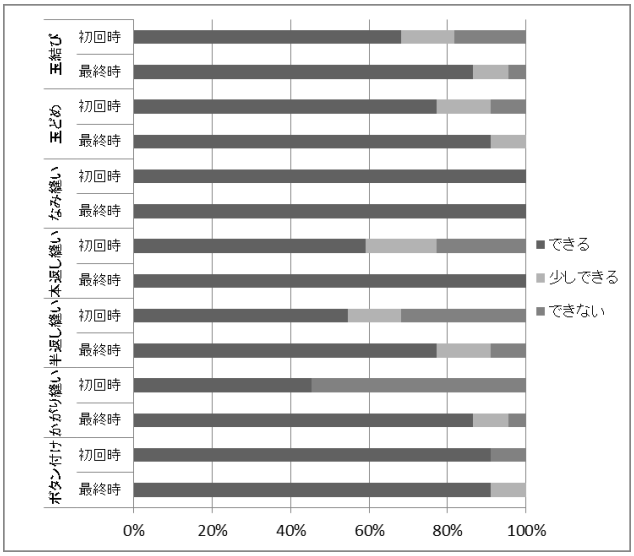


図 7 手縫いの能否（初回時・最終時の比較）

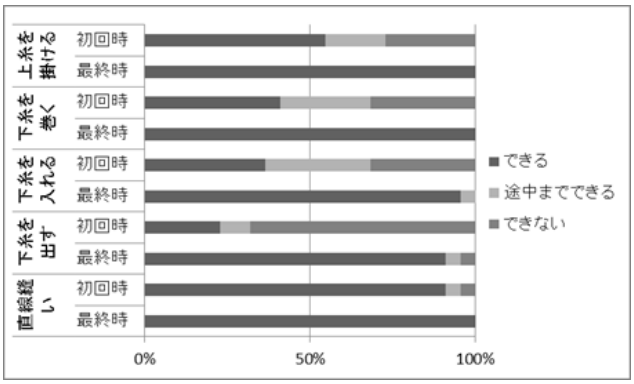


図 8 ミシンの操作と縫いの能否（初回時・最終時の比較）

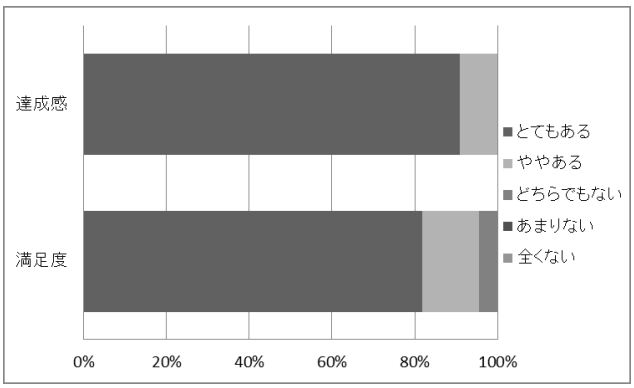


図 9 達成感・満足感

次に『将来小学校教諭になり家庭科を指導することになった場合、本授業でその知識・技能を身に付けることができたか』について記述させたレポート内容をまとめたものが以下である。

・最初はミシンの糸を通したり下糸を巻いたりする方法が分からず苦労したけど、エプロン製作を進めるうちに操作ができるようになった。
・手縫いは小学生の頃から得意だったが、この授業の中で色々な縫い方を学べて良かった。ミシンも最初は友達に糸を通してもらったりしたけど、途中からどんどん自分でもできるようになった。
・ミシンは小・中・高の家庭科でずっと相性が悪く、私が使えば壊れると言われていました。この授業でエプロンを作ると聞いて、絶対無理と思ったけど自分の力で完成させることが出来たことに感激した。ミシンの直進縫いも端から 1 ㎜で縫えるようになったし、角の部分も上手く縫えるようになった。
・私は昔から家庭科が得意だったので、ミシンができない友達に教えていました。こういう風に子ども達にも教えることができるかなと自信がついた。
・自分の力で手縫いとミシン縫いを使ってエプロンが作れるようになった。自信がないと思っていたけど、今では自信になっている。
・エプロン製作はなんとかできたけど、自分が小学生に教えることができるかというと自信がない。

自分では出来るけど、なかなか人に教えるのは難しいと思う。もっと学べる時間が欲しいと思った。
・私は小学校教諭を目指している。家庭科は専科の先生がいるから自分が教えなくてもいいと考えていたが、もし着任した小学校に専科の先生がいない場合は、5年、6年の担任が家庭科を担当することになると授業で聞いて焦った。私がこの家庭科教育法でクリアできたことは、先生が手取り足取り指導して下さったからできたことで、これを私が児童に指導していくとなると不安が募る。もっとこの授業のように実技を授業の中で行えたらと思う。

4． 結果と考察

初回時アンケートでは手縫い･ミシン縫いともに理解度に個人差があり、特にミシンで物を縫うこと以前に、ミシンの操作方法に自信がないと感じている学生が多くあった。しかし、エプロン製作を通じ、手縫いやミシン縫いの縫製方法だけでなく、正確なミシンの操作方法を習得することが出来たことも最終時のアンケート結果に顕著に表れている。

エプロンのポケット部分にどのような縫製方法でフェルトを縫い付けているかは学生の自由としているが､ポケットのデザインを表現するために、授業で学んだ手縫いの手法の中から2種類以上は採用することとしている。この場合､「ブランケットステッチ」は小学校の家庭科では学ばないが、フェルトを縫い付ける場合には、なみ縫いと比較すると丈夫であること、またかがり縫いと比べると見た目が良いということもあり､「ブランケットステッチ」の縫製方法を指導した。すると「ブランケットステッチ」､「なみ縫い」､「本返し縫い」を多く採用する学生が見られ、ブランケットステッチやなみ縫い、本返し縫いに関しての習得率は最終時アンケート結果をみても高いことが分かる。

またエプロンにボタンを付ける学生が少なかったため、ボタン付けやかがり縫いの縫製技術の習得率はアンケートによると「ボタン付け」90%、「かがり縫い」86%である。確かになみ縫いや本返し縫いと比較すると若干低いが、概ねの学生は小学校家庭科で学ぶ手縫いの縫製技術を習得できたといえる。

エプロン製作という実技授業では、手縫いなどの繰り返しの練習の中で縫製技術が高まる。毎週の授業の中で自身の技術が向上している様子が学生自身でも感じることができており、また学生同士が教え合いながら縫製を進めている部分においては、自信や達成感に繋がっていると思われる。

しかしながら、最終時の記述レポートの中にも「自身での製作はできるが、これを児童に指導していくとなると自信がない」と自分自身が教員になった場合、縫製方法を正確に教えることができるか不安を感じている学生もいる。家庭科のように実技をともなう科目、そして特に衣分野では、自身の縫製技術を向上させることが最も重要になる。

著者（2015）のゼミ実践報告でも述べているように[x]、本学の学生は縫うことが好きで、自分自身を不器用だと感じていても縫製技術を学び自分の力で製作していきたいと考えている。このように意欲がある学生が多くおり、縫製技術の向上も十分に期待できる。

本授業では15回の授業のうち5回を衣分野として基礎縫いやエプロン製作を行っているが、この5 回だけでは学生が小学校教諭になった際、自信を持って児童に家庭科を教えていくことのできる知識や技術を習得するのは難しい。また前期科目であったため、折角習得した縫製に関する知識や技術が後期に何もしない間に忘れてしまうという声も学生から多く聞いた。

下川ら（2008）によると繰り返しの基礎縫いや縫製作業を行うことにより、縫製技能の向上や定着がみられると述べている[xi]。技術の向上は繰り返しの練習によって得られるわけであるが、それは時間が必要となってくるのである。

“はじめに”でも述べたように､永田らは(2014)「小学校教員は家庭科に関する専門的な教育を受けておらず、家庭科授業経験のない教員も多

い。そのため家庭科教育研究の指定にあたると不安を感じるが、授業未経験者と授業経験者には、不安内容に違いがある。研修等の際には授業経験の有無に応じて内容や方法を変える必要があることが示唆された」と述べており、やはり『経験』が大きく自信に作用するということが分かる。

短期大学での学ぶ時間が短く限られてはいるが、家庭科のように実技が伴う科目を学ぶ場合、本授業だけでは学生自身が小学校教員になった場合に自信を持って家庭科教育を行うことは難しい。よって例えば1回生時に開講される「家庭」を必ず履修した上で、2 回生時で「家庭科教育法」を履修するという縛りを付けることにしてはどうかと考える。また開講時期に関しても後期開講が適していると思われる。

小学校の家庭科教科書に掲載されている布を用いた作品の数は多い。これらの作品を児童に指導するには、自身で作品を完成させる力を十分に身に付けなければならない。本授業以外にも手縫いやミシン縫いを習得し、参考作品を製作する機会を持てることが最良であると考える。学生が将来的に小学校教員になり、自信を持って児童に家庭科を指導するためには、学生に今のうちに経験を多く積ませることが重要である。永田も上述しているように､経験の有無が自信に大きく作用する。そのためには実技的な授業をより多く持ち、基礎的な縫製技術を実践的に学び、十分に習得する仕組みが今後必要であると思われる。

5．引用文献・参考文献

[i]文部科学省「小学校学習指導要領解説家庭編」平成 20 年 3 月
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1387017_9.pdf#search=%27%E5%B0%8F%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E5%AE%B6%E5%BA%AD%E7%A7%91+%E7%9B%AE%E6%A8%99%27

[ii]川端弘子「被服製作学習が育むもの」『衣服学会誌 52』2008, p 7-10

[iii]永田智子,鈴木千春「小学校家庭科教育研究指定校の教員が抱える不安」『日本家庭科学会大会第 57 回大会 ポスター発表』2014（岡山大学）

[iv]板倉明子「『家庭科教育』に関する授業方法の一考察―小学校・中学校・高校における「家庭科」の授業実践を基にして―」『プール学院大学研究紀要 第 53 号』2012, p 217

[v]開隆堂出版株式会社「小学校家庭科教科書」平成 29 年 2 月 6 日発行 p18-24, p34-41, p50, p88-95

[vi]東京書籍株式会社「小学校家庭科教科書」平成 29 年 2 月 10 日発行 p18-24,p52-61,p82-91,p110, p118-123

[vii]夙川学院短期大学「2017 年度シラバス　家庭科教育法」p84

[viii]兵庫県教科書株式会社　兵庫県教育図書株式会社　C:¥Users¥aya¥Desktop¥教育系論文参考¥兵庫県教科書採択(28 年度公立小学校).htm

[ix]日景弥生,川端博子,鳴海多恵子「糸結びテストによる手指の巧緻性の評価」『衣服学会誌 46(1)』2002, p19-24

[x]白坂文「縫える先生になろう！子ども学ゼミでの実践報告(Ⅰ)」2015, p14

[xi]下川美智子, 大江真理子, 石澤めぐみ, 佐々木敬子, 須藤雅美, 中村亜希子, 工藤正道「縫い方の基礎的な技能を高めながら、生活に役立つ物を作る楽しさや達成感を味わわせるための指導法の工夫」2008

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は小学校家庭科における基礎縫い指導の重要性を示した実践論文である。現在、短期大学では限られたカリキュラムの中で実技を伴う科目「家庭」「家庭科教育法」が、小学校現場で自信をもって実技指導のできる学生を養成することを目的として取り組まれている。今後、学生が基礎的な縫製技術を習得することが重要であり、それに向けて十分な取り組みが必要なことが示唆された。

（担当：髙田佳孝）